Japanese Association for Religious Studies

第十二部会

サンタ・ムエルテ信仰をめぐる正統性とその変化

井上大介

本発表では、メキシコ・テピート地区を中心にその影響を拡大するサンタ・ムエルテ信仰を題材に、メキシコにおける死の表象とそれをめぐる正統性について考察する。

ジェフリー・ゴーラー、フィリップ・アリエスらは、死が現代の人々にとって疎遠なものとなっている点を指摘し、死のタブー化が近代化の中で進展していったと論じている。

一方、中世ヨーロッパを対象としたミハイル・バフチンの考察では、民衆文化においては出生と墓場、つまり生と死が共立していたという。

メキシコでは、スペインによる征服期以来、独立期、改革期、革命期を通じ、死というものが様々な形で表象されてきたが、そのような動向は、時には民衆的活力が顕在化する現象として立ち現れ、時には、メキシコ・ナショナリズムの資源として利用されてきた。つまり死というものが、ヘゲモニー的状況の中で常にその位置を変化させてきたのである。

最も顕著な事例としては、現在、メキシコにおいて国民的慣習として定着している「死者の日」の存在であろう。同習俗は、十六世紀以降、先住民文化の発露としてカトリック文化とのシンクレティックな状況の中でメキシコ社会に根付いてきたとされているが、歴史的にはカトリック教会による様々な制約を受けてきたと共に、世俗国家との関係では公衆衛生、公共墓地における秩序維持等の目的で政府による管理が企てられてきた。さらに後年には、メキシコ国民文化の題材として大いに利用されることとなり、二〇〇三年以降は、ユネスコの世界無形文化遺産に登録され、社会で広くその正統性を獲得している。また同習俗の視覚化に大きな影響を与えたとされるグアダルーペ・ポサーダらによる骸骨で表現された死の表象などは、現代メキシコにおいて国民的人気を博すに至っている。

他方、サンタ・ムエルテ信仰も同様に、死を骸骨で表象した文化現象であり、マジョリティ宗教との関係においては、聖人像崇拝、ロザリオの実践など、メキシコ・カトリシズムとも多くの共通点を有している。しかし同信仰が「死神」を信仰の対象としている点で、カトリック教会からは「サタニズム的信仰」と異端視されている。

同信仰の発展においては、街中の祭壇に設置された骸骨への参拝を中心にその影響力を拡大するグループと、教会を設置し、そこで催すミサなどの定期的儀礼によって信者を増加させつつあるグループが存在する。

前者の代表は、テピート地区アルファレリア通りの祭壇で行われるロザリオ儀礼を中心とした動向であり、後者の代表は同じくテピート地区ブラボー通りに設置された「米墨カトリック伝統教会」を中心とした動向である。後者に関しては、二〇〇

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

三年に宗教法人格が付与されて以来、メキシコ・シティの中心街への宗教行列など社会空間における諸活動により人々の関心を集めてきた。しかし、二〇〇五年には政府により同教団の法人格が剥奪されるに至ったと共に、二〇一一年一月には同教会の中心者が誘拐に関与したとして逮捕され、同現象に対する社会的認識は、非常にネガティブなものとなっている。

発表では、このような動向を紹介しながら、近年、文化人類学やカルチュラル・スタディーズにおいて関心が高まっている社会の支配層による社会空間の管理とそこにおける民衆文化の活力に関する諸理論を検討し、サンタ・ムエルテ信仰が、既存の文化資源の流用をベースとした従属階級による死をめぐる民衆文化的動向であり、社会空間の中で対抗的ヘゲモニーとして機能しつつあるという点を例証する。

分裂と信仰実践
――ネパールにおけるプロテスタントの教会分裂――

丹羽　充

本発表では、ネパールのプロテスタントの間で相次ぐ教会分裂について、二つの具体的な事例を通して考察する。教会分裂は、これまで、「教義（解釈）の違い」に由来するのみならず、「西洋［海外］の支配に対する抵抗」として、また「部族主義」の残滓として発生するとも理解されてきた。しかし発表者の調査では、こうした事例はネパールではほとんど見られなかった。

様々な種類の分裂の中でも、ネパールのそれを理解する足がかりとなるのは、エゥイ・ハン・シンとヒュンパーク、それからステファン・グレイザーによる研究である。シンとパークによれば、アメリカの韓国人教会で相次ぐ分裂は、往々にして新たに創設される教会において高い役職を確保する、つまり名誉を獲得するために実践されているのだという。またグレーザーは、高度に官僚化した教会では役職を巡る争いが発生し、それが分裂につがなることを報告している。すなわちこれらの論者は、分裂を、名誉を獲得するための「道具主義 instrumental-ism」と捉えているのである。

ネパールにおける教会分裂も、現地のプロテスタント共同体から、「名誉［高い役職］」や「金儲け（外国人宣教師から教会への資金援助を獲得し、名誉を高めたり、時にはその私的流用を目論んでいたり）」を目的としていると語られる。こうした言説は、一般信者の水準でも流通しており、分裂は道具主義として侮蔑的に評価されているのである。これに対して発表者の調査では、「名誉」や「金儲け」といった目的を語る分裂の実践者など一人もいなかった。だが、もし仮にそうした目的を抱いているとしても、それを語ることなどあるだろうか。

分裂の実践者は自らの分裂を、神から授かった「ビジョン」を実現するためだと説明する。ビジョンの内容について尋ねてみると分裂前の所属教会との比較のうちに、「自由で民主的な教会の創設」、「異なった地域における布教の促進」、「福音主義的な教会の創設」といった答えが聞かれる。しかし往々にし

NII-Electronic Library Service